

長倉洋海著

フォト・ジャーナリストの眼



岩波新書

223

江苏工业学院图书馆
長倉洋海著
フォトジャーナリストの眼
蔵書章

boreas

eurus

zephyrus

notus

長倉洋海

1952年北海道釧路市に生まれる

1977年同志社大学法学部卒業

通信社カメラマンを経て、

現在、フリーランスのフォト・ジャーナリスト

1983年「日本写真協会新人賞」受賞

写真集「若き獅子マスードーアフガン 1983～
88」(河出書房新社)

「サルバドルー救世主の国」(JICC 出版局、

1990年日本ジャーナリスト会議奨励賞受賞)

「Dear Friendー紛争地の子どもたち」
(JICC 出版局)

著書「ゲリラ・七つの戦線」(未来社)

「内戦ーエルサルバドルの民衆」(晩聲社)

「峡谷の獅子ー司令官マスードとアフガン
の戦士たち」(朝日新聞社)

「フィリピンーわが祖国」(れんが書房新社)

「激動の世界を駆ける」(講談社文庫) など

フォト・ジャーナリストの眼

岩波新書(新赤版) 223

1992年4月20日 第1刷発行 ©

著 者 なが 長 くら 倉 ひろ 洋 み 海

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

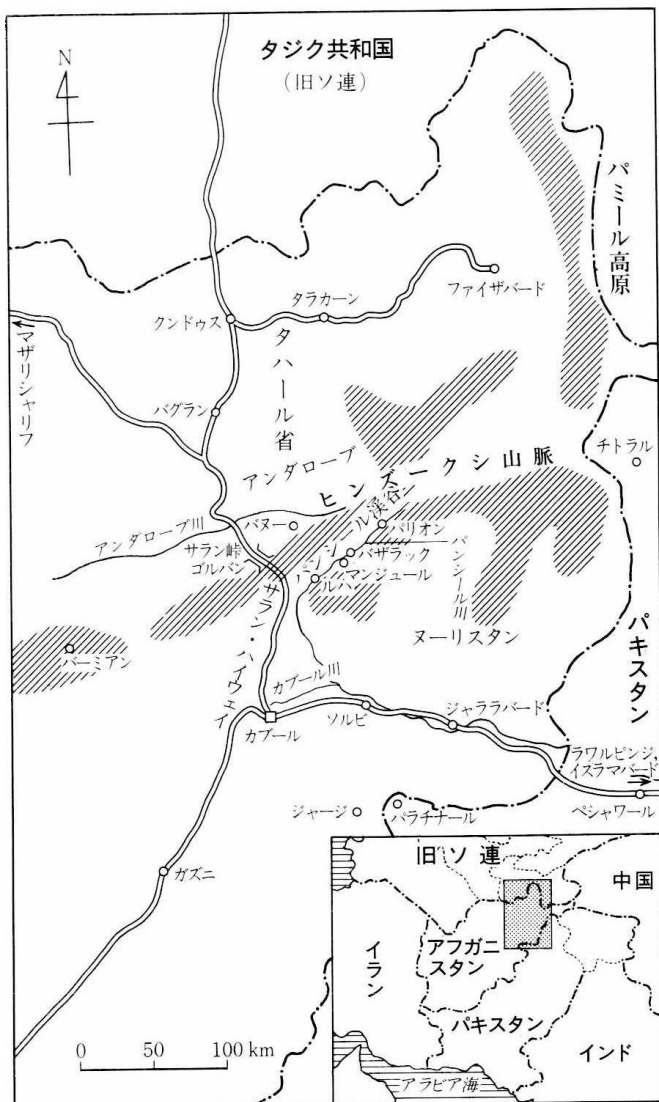
電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

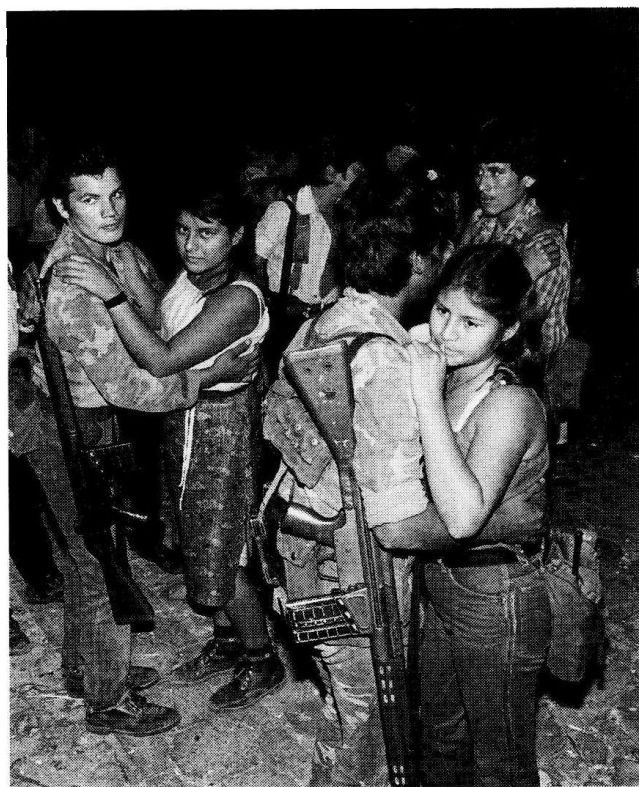
Printed in Japan
ISBN4-00-430223-4



アフガニスタン

目

次



大晦日のダンス・パーティーで躍るゲリラの若者たち
(エル・サルバドル, 1984年)

I
戦場から人間へ…………… I

——エル・サルバドル、一九八二—九〇年——

入国拒否² 大攻勢⁶ 戦場のハイエナ¹⁰

テロに染まる大地¹⁸ 市場で働く人々²⁶

難民キャンプの少女ヘスース³² やさしき人々³⁸

ビリヤード場のカルロス⁴⁴ コーヒー農園で⁴⁸

平和を待ち続ける人々⁵³ 私とエル・サルバドル⁶⁰

II
一人ひとりの人間をみつめて…………… 69

——アフガニスタン・イスラム戦士との二五〇日——

ソ連兵の母たち⁷⁰ マスードとの再会⁷⁴

元ソ連兵ニコライ⁸⁶ 会えなかった戦士たち⁹¹

ボディガード、ハビブの結婚⁹⁸ 詩人戦士カリル¹⁰²

若者の心、イスラムの心¹⁰⁴ 旅、取材、人^{III}

子どもたちの未来¹¹⁶ 再建への道¹²²

Ⅲ 歴史を生きる人々……………129

——フィリピンで見たこと——

本当に歴史を動かすもの……………130 政変前夜の伝染病棟で……………131

ネグロスの友人、オウカー……………138 スラム・アントニオの家族……………145

スラムで学んだこと……………154 カラオケ・バーの少女……………156

Ⅳ マニラから日本へ……………161

——フィリピン出稼ぎ労働者を追って——

「寄せ場」のフィリピン人……………162 悲しい帰国……………172

フィリピンへ……………180 出稼ぎ者に映った日本……………188

マクロの眼……………191

Ⅴ もうひとつの日本……………195

——山谷の男たち——

山谷の男たち……………196 夏祭り……………200 越 冬……………206

ちびちゃんの死……………214

Ⅵ 私のフォト・ジャーナリズム ……………

217

——パレスチナで考える——

パレスチナへ²¹⁸ ヨルダン川西岸で²²⁴

難民キャンプの母親²³⁰ 私のフォト・ジャーナリズム²³⁵

フォト・ジャーナリストの生き方²³⁸

あとがき…………… 243

I 戦場から人間へ

— エル・サルバドル, 1982-90 年 —



中央市場の入口で母の帰りを待つ少女
(サン・サルバドル, 1982 年)

入国拒否

一九八九年十一月一日。三度目、四年ぶりのエル・サルバドルだ。

最初の時も二度目の時も、入国審査を終え、飛行場を一步でると、「これから内戦下の中に入っていくんだ」という緊張感と、亜熱帯のじととした湿気から吹き出した汗が、私のシャツをぐっしょりと濡らした。そして、動き出したマイクロ・バスの小窓から流れこむエル・サルバドルの風が心地よくなる頃、「いい写真を撮るんだ」という決意が心の底から湧き上がってきたものだった。今回も、そんな光景を予期していた。

だが、思わぬハプニングが起きた。飛行場の入国審査で、入国を拒否されてしまったのだ。エル・サルバドル政府発行の古い記者証を見せたのが、逆に相手に「ジャーナリスト？」という警戒心を呼び起こしてしまったようだ。入国審査官は「ジャーナリストの安全は保証しかねるので入国を許可することはできません」という。「どうして取材させないんだ。危険はオレの責任じゃないか」と、その入国審査官の上司にも喰い下がるが、「ダメです」と冷たい表情で突き放される。頭をガンとなぐられたような気がした。フィルムを二百本以上持って、十六時間も飛行機の旅をしてやってきたのに……。

左翼ゲリラFMLN（ファラブンド・マルチ民族解放戦線。ファラブンドは一九三二年の農民蜂起の指導者の名）が首都と地方都市で大攻勢を開始して、もう十日以上がたつが、まだ戦

闘は収まっていけない。政府は外国人ジャーナリストに、まだ戦闘を収めきれないことを見せたくないのだろう。今までも、外国人ジャーナリストはゲリラに同情的だと非難してきた。

私は諦めきれないまま、荷を受け取り、隣国のグアテマラ行き of 便に乗り換える。その機内で「ブラック・リストには載ってはいないようだし、グアテマラ国境のイミグレーション・オフィス（入国管理事務所）は、オン・ライン化されていないから、きつと、空港での入国拒否は伝わっていないはずだ。陸路で入れば大丈夫」と自分にいい聞かせながら、到着までの三十分を過ごした。

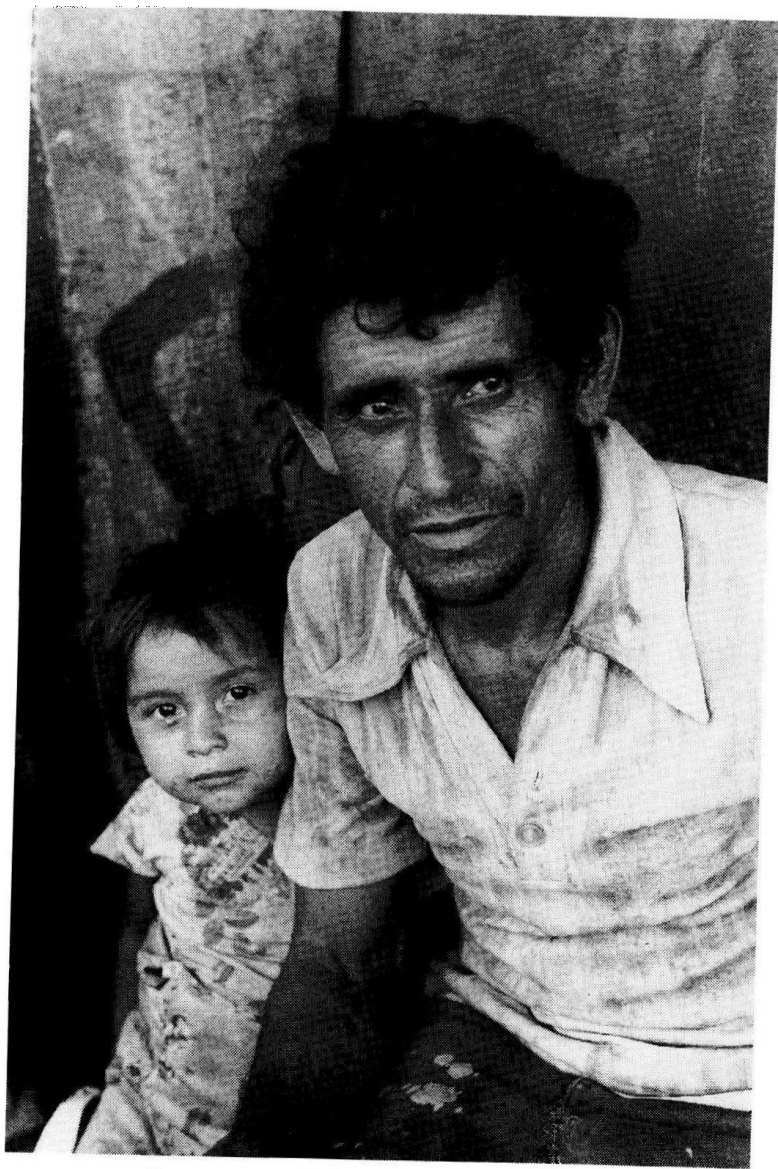
グアテマラで、現地のジャーナリストに相談すると、「そのボサボサの頭とむさ苦しい格好じゃ、日本の左翼ゲリラと間違えられたのかもしれない」と脅された。現実に数日前、日本人旅行者が日本赤軍かと疑われ、逮捕される事件があったという。あわてて頭を整髪して、学生時代からの汚れたオーバーとマフラーを脱ぎ捨てて、さっぱりしたシャツに着替えた。

三日後、グアテマラから陸路、バスでエル・サルバドルに向かった。国境を越えるバスは、みな朝が早い。正午には首都サン・サルバドルに到着する。午後からは、南北アメリカを縦貫するバン・アメリカン・ハイウェイにもゲリラが出没し、バスが燃やされることもあるからだ。国境のイミグレーション・オフィスの係官は、カメラやフィルムばかりでなく、洗面用具入れの中まですべてを調べ、台の上にぶちまける。「ムッ」としたが、我慢して荷を詰め直し、

「ボクは戦争を撮る気はないんです。ほら、子どもを撮っているんです」と私が撮った子どもが写っているポスト・カードを見せる。すると、厳しい顔付きだった係官の表情が急になごんで、「七日間有効」の入国スタンプを押してくれる。「やった！これでエル・サルバドルに入る」と思うと、安堵のため息が出た。

バスは再び首都に向け走り出したが、間もなく兵士に止められた。兵士は二人の若い乗客の所に歩み寄り、パスポートをチェックする。不審な点があったのか、二人は下ろされた。車内はざわめいたが、バスがスピードを上げるにつれ、人々は何事もなかったかのように、自分たちの話に戻っていく。空席になった二人の若者の席にも、他の乗客が座ってしまった。ただ、字が書けないため、入国カードをあの前者たちに書いてもらった農民だけが、いつまでも二人が下ろされた方向を見ていた。

二人の青年はゲリラ・シンパと疑われたのだろうか。心配だ。私もエル・サルバドルで、軍に疑われて、銃を喉元に突きたてられた経験がある。その時のことを思い出し、ゾツとした。「だけど、オレは自分の写真を撮りたい。この五年間で、エル・サルバドルがどう変わったのか、自分が出会った人々はどう生きているのか。それを写真に写しこむんだ。そのためにここまで来たんだ」といい聞かせて、恐怖感を振り払うように窓の外を見た。



難民キャンプの父と子(サンタ・テクラ, 1985年)

大攻勢

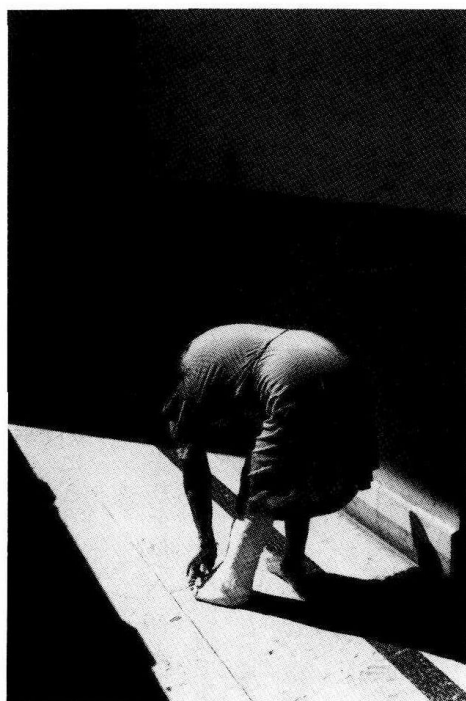
一九八〇年から、政府軍との内戦を続ける左翼ゲリラFMLNは、八九年十一月、首都を中心に各地で大攻勢をかけた。私が到着した頃には、大きな戦闘はゲリラ側の撤退という形で収まっていたが、首都近郊では依然、散発的な戦闘が続いていた。宿に荷を置くと、ジャーナリストの情報センターとなっているカミノレアル・ホテルに向かう。そこで、以前よく一緒に取材したことのあるイギリスのフリー・カメラマン、ラウルとぼったり出会った。久しぶりの対面にうれしくなる。

彼に誘われ、近郊の住宅街の取材に向かう。地区を包囲する兵士たちの間を、両手で布団や身の回りの物を抱えた住民たちが、青ざめた顔で、安全な所に逃げ出そうとしている。唇は恐怖のためか、小刻みにふるえている。八年前、政府軍とゲリラの戦闘を、銃声のたびに顔を引きつらせながら、脅えた表情で見つめていた母と子の姿とダブって見えた。

ラウルと別れて宿に戻ると、夜の七時。近くで食事しようと表に出るが、外は真っ暗闇だ。人の影も車も、まったく見えない。石けんと洗剤を買おうと、近くの店屋をのぞいてみるが、どの店もシャッターが下りている。ときおり、無人の通りを、兵士が四、五人でパトロールしているだけ。戒厳令下の町のような。十一時以降は、外出禁止令が出されており、「撃たれても責任を負えない」と軍は発表していた。食事を諦めて寢床につくが、あちらこちらで銃撃戦

の音が聞こえる。三十分おきくらいに、軍のヘリが低空飛行で、ホテルの上を通過していく。近くの陸軍病院に負傷者を運びこんでいるのだろう。なかなか寝つけない。

翌朝、市内の戦争避難所を訪れた。エル・サルバドルの民間救援組織グリーン・クロスが市民から支援金を募って、最低限の食料を配付している。グリーン・クロスはボランティアの若者で構成され、二台の救急車で、戦闘地区の住民を救助するグループだ。避難所には、戦闘の



政府軍の爆撃で足を負傷した女性
(首都の戦争避難所、1989年)

激しかった時は五百人以上が収容されていたが、今は二百人ほどが生活し、庭先で女たちの炊事する煙が上がっている。男たちが仕事に出ているせいか、避難所の中はガランとしていた。

女性の一人は「政府軍が空から、無差別に機関銃で撃ってきた。爆弾も落とした。一歩も外に出られず、物かげで

じっとしているしかなかった。本当に生きた心地がしなかったよ。屋根や壁には大きな穴が開いてしまって、クリスマスも近いのにどうしたらいいの……」と訴える。政府軍は、ゲリラが潜んだ貧民街を徹底して破壊した。

普段は市場や路上のささやかな物売りをして、日々の生活費を稼いでいる彼らは仕事にでられず、いっさいの収入源が断たれた。息子が機関銃で足を撃ち抜かれたという女性は、「入院費も見舞金も、いっさい政府からは出ないのよ」と力なく話した。内戦開始以来、最大といわれる戦闘で、政府軍とゲリラあわせて千人が死亡し、民間人は千人を越える死者と数千人の負傷者を出した。

避難所では、人々は床に簡単なシーツを敷いて横になっていた。持ち出したラジオをぼんやり聞いたり、ジッと考えごとをしたりしている。あいさつをして写真を撮りだすと、子どもたちがワッと集まってきた。「私も撮って」、「ボクも」といっせいに声を上げる。その明るい表情は、路上で遊んだり市場で働いたりする子どもたちと変わらない。戦闘のことを聞くと、「目の前で人が死んだんだ。弾がこんなふうに頭に当たったんだよ」と小さな男の子が話す。五歳の女の子は、「ママ？ 死んじゃった」と大きな瞳をクリクリさせながら無邪気に答える。戦争孤児院を取材した時（八二年）のことを思い出した。孤児院の食堂に入ると、中にいた三歳ほどの子どもたちが、私を見て、「パパ」と呼んだのだ。何ともいえない気持ちになった。